

- 1次元波動方程式の初期値境界値問題
- 2次元円環領域でのラプラス方程式の境界値問題
- 次回は中間レポート解答用紙と赤鉛筆持参（前半模擬テストの解説を行う）．  
合わせて後半模擬テストの解説も行う．期末テストは6月4日予定．

## 20. 初期値境界値問題の変数分離による解法（2）

### 1次元波動方程式の初期値境界値問題

（要点）：1次元の波動方程式の初期値境界値問題を，変数分離法によって，各変数毎の常微分方程式に帰着し，フーリエ級数を利用して，初期値を満たす（ $t = 0$  で与えられた初期波形および初期波形変化速度と一致する）ような解を構成する．次にエネルギー保存原理を用いて，解の一意性を示す．

$x$  軸上の  $[0, 1]$  に置かれた長さ 1 の細い弦の垂直方向の振動を考える．時刻  $t$  位置  $x$  での垂直方向のずれ（変位）を未知関数  $u(t, x)$  とする．弦の両端は固定されている．ただし，重力の影響は考えない．時刻 0 での各位置での弦の変位及び変位の変化速度は関数  $f(x)$  と  $g(x)$  して与えられているとする．

$u(t, x)$  は， $(t, x) \in [0, \infty) \times [0, 1]$  で連続で，内部では滑らかで，以下を満す．

$$\frac{\partial^2 u}{\partial t^2}(t, x) = \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(t, x) \quad \text{for } t > 0, 0 < x < 1 \quad (1)$$

$$u(t, 0) = u(t, 1) = 0 \quad \text{for } t \geq 0 \quad (2)$$

$$u(0, x) = f(x), \lim_{t \rightarrow +0} \frac{\partial u}{\partial t}(t, x) = g(x) \quad \text{for } 0 \leq x \leq 1 \quad (3)$$

(2) より， $f(0) = f(1) = g(0) = g(1) = 0$ ．さらに，条件として以下を仮定する．

- $f(x)$  は  $[0, 1]$  で連続かつ  $(0, 1)$  で 4 回連続微分可能， $f(x) \not\equiv 0$ ．

さらに， $f(x)$  を  $[-1, 1]$  に拡張し，周期 2 の「奇関数」で連続かつ区分的に滑らかな関数と見なした時， $f''(0) = f''(1) = 0$ （簡単のために）．

- $g(x)$  は  $[0, 1]$  で連続かつ  $(0, 1)$  で 3 回連続微分可能．

この 1次元波動方程式の初期値境界値問題を「変数分離法」によって解く：

$$u(t, x) = T(t)X(x), \quad T(t) \not\equiv 0, X(x) \not\equiv 0$$

のような形（変数分離形）で，(1) & (2) を満す解があると仮定する．(1) より，

$$T''(t)X(x) = T(t)X''(x) \quad (0 < t, 0 < x < 1)$$

となり、特に、 $T(t) \neq 0, X(x) \neq 0$  なる  $(t, x)$  では、 $\frac{T''(t)}{T(t)} = \frac{X''(x)}{X(x)}$  が成り立つが、この左辺は  $x$  に依らず、右辺は  $t$  に依らないので、結局、ある定数でなければならない。その定数を  $-\lambda$  と置くと、

$$\frac{T''(t)}{T(t)} = \frac{X''(x)}{X(x)} = -\lambda$$

より、 $T, X$  は以下の（常）微分方程式を満す。

$$T''(t) + \lambda T(t) = 0 \quad (0 < t) \quad (4)$$

$$X''(x) + \lambda X(x) = 0 \quad (0 < x < 1), \quad X(0) = X(1) = 0 \quad (5)$$

- (5) は熱方程式の場合と同様、境界条件より、 $\lambda$  が限られた正の値（固有値）:

$$\lambda = (n\pi)^2 \quad (n = 1, 2, \dots) \quad (6)$$

の場合にのみ、(5) が解を持ち得て、各  $n = 1, 2, \dots$  に対して

$$X_\lambda(x) = X_{(n\pi)^2}(x) = C \sin n\pi x$$

が一般解になる（ $C$  は任意定数）

- 一方、(6) の  $\lambda = (n\pi)^2$  に対する (4) の一般解は、 $A, B$  を任意定数として、

$$T''(t) + (n\pi)^2 T(t) = 0 \quad \text{より、} \quad T_\lambda(t) = T_{(n\pi)^2}(t) = A \cos n\pi t + B \sin n\pi t$$

- よって、各  $n = 1, 2, \dots$  に対して

$$(A \cos n\pi t + B \sin n\pi t) \sin n\pi x \quad (0 \leq t, 0 \leq x \leq 1)$$

は、(1) & (2) の解である。ただし一般には (3) を満たさない。もちろん、特別な形の  $f(x), g(x)$  に対しては、(3) を満すようにできる。例えば、 $f(x) = \sin \pi x, g(x) \equiv 0$  の場合は、 $n = 1, A = 1, B = 0$ 。

- 斉次微分方程式の重ね合わせ原理より、 $A_1, B_1, A_2, B_2, \dots$  を任意定数、 $m$  を任意の自然数として下式も (1) & (2) を満すが、一般には (3) を満たさない。

$$u(t, x) \stackrel{\text{def}}{=} \sum_{n=1}^m (A_n \cos n\pi t + B_n \sin n\pi t) \sin n\pi x \quad (0 \leq t, 0 \leq x \leq 1)$$

ところが、実は、 $f(x), g(x)$  に合わせて、 $A_1, B_1, A_2, B_2, \dots$  を適切に選ぶと、

$$u^*(t, x) \stackrel{\text{def}}{=} \lim_{m \rightarrow \infty} \sum_{n=1}^m (A_n \cos n\pi t + B_n \sin n\pi t) \sin n\pi x \quad (7)$$

は、 $0 \leq t, -\infty < x < \infty$  に対して定義可能で（右辺が収束して）、(1) & (2) & (3) の解になる。

証明

まず、初期条件 (3) を満す  $A_1, B_1, A_2, B_2, \dots$  を求めるために、熱方程式の場合と同様に、 $f(x), g(x)$  を  $[-1, 1]$  に拡張し、周期 2 の「奇関数」と見なして、

- $f(x), g(x)$  を Fourier 級数展開すると、絶対かつ一様収束 ( $x$  に関して) する。

$$\begin{aligned} f(x) &= \sum_{n=1}^{\infty} \left( \int_{-1}^1 f(y) \sin n\pi y dy \right) \sin n\pi x, \\ g(x) &= \sum_{n=1}^{\infty} \left( \int_{-1}^1 g(y) \sin n\pi y dy \right) \sin n\pi x \end{aligned}$$

- 一方、(7) の右辺の級数が  $(0, x)$  で収束するならば、定義より、

$$u^*(0, x) = \sum_{n=1}^{\infty} A_n \sin n\pi x \quad \text{なので、必要条件として、}$$

$$A_n \stackrel{\text{def}}{=} \int_{-1}^1 f(x) \sin n\pi x dx = 2 \int_0^1 f(x) \sin n\pi x dx \quad (8)$$

と置けば、(7) の右辺の級数は、少なくとも  $t = 0$  では絶対収束かつ一様収束 ( $x$  に関して) し、 $u^*(0, x) = f(x)$  となる。

- さらに、定義 (7) の右辺を  $t$  に関して形式的に項別微分した級数も、任意の  $x$  毎に、 $t = 0$  の近傍で一様収束すると仮定すれば、 $t \rightarrow +0$  の時、

$$\sum_{n=1}^{\infty} (-n\pi A_n \sin n\pi t + n\pi B_n \cos n\pi t) \sin n\pi x \rightarrow \sum_{n=1}^{\infty} n\pi B_n \sin n\pi x \quad (9)$$

なので、必要条件として、

$$B_n \stackrel{\text{def}}{=} \frac{1}{n\pi} \int_{-1}^1 g(x) \sin n\pi x dx = \frac{2}{n\pi} \int_0^1 g(x) \sin n\pi x dx \quad (10)$$

と置けば、(7) の右辺を  $t$  で項別微分した級数は、少なくとも  $t = 0$  では絶対収束かつ一様収束 ( $x$  に関して) し、 $\lim_{t \rightarrow +0} \frac{\partial u^*}{\partial t}(t, x) = g(x)$  となる。

そこで、上の (8), (10) の  $A_n, B_n$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) を用いて定義した (7) において、

- (i) 右辺の級数が、 $0 \leq t, -\infty < x < \infty$  で一様収束する。
- (ii) 右辺を形式的に項別微分した級数が、 $0 \leq t, -\infty < x < \infty$  で一様収束する。

の 2 つを証明すればよい (証明はオンライン付録)。なぜなら、

- (i) が言えれば、(7) の  $u^*(t, x)$  は、 $0 \leq t, -\infty < x < \infty$  で連続で、 $u^*(t, 0) = u^*(t, 1) = 0$  も明らかで、(2) 及び (3) の前半が満される。

- さらに, (ii) が言えれば, 級数の項別微分ができ,

$$\begin{aligned}
\frac{\partial u^*}{\partial t}(t, x) &= \sum_{n=1}^{\infty} (-n\pi A_n \sin n\pi t + n\pi B_n \cos n\pi t) \sin n\pi x \\
\frac{\partial^2 u^*}{\partial t^2}(t, x) &= -\sum_{n=1}^{\infty} (n\pi)^2 (B_n \sin n\pi t + A_n \cos n\pi t) \sin n\pi x \\
\frac{\partial u^*}{\partial x}(t, x) &= \sum_{n=1}^{\infty} n\pi (A_n \cos n\pi t + B_n \sin n\pi t) \cos n\pi x \\
\frac{\partial^2 u^*}{\partial x^2}(t, x) &= -\sum_{n=1}^{\infty} (n\pi)^2 (B_n \sin n\pi t + A_n \cos n\pi t) \sin n\pi x \quad (11)
\end{aligned}$$

が  $0 < t, -\infty < x < \infty$  で成り立ち,  $u^*(t, x)$  が (1) を満し, かつ, 式 (9) より,  $\frac{\partial u^*}{\partial t}(t, x)$  の右辺は  $t = 0$  で連続なので式 (3) の後半も満す.

### 1次元波動方程式の初期値境界値問題のエネルギー保存則

(1), (2), (3) を満す関数  $u(t, x)$  に対し, 時刻  $t$  でのエネルギー  $E(t)$  を以下で定義する.

$$E(t) \stackrel{\text{def}}{=} \frac{1}{2} \int_0^1 \left\{ \left( \frac{\partial u}{\partial t}(t, x) \right)^2 + \left( \frac{\partial u}{\partial x}(t, x) \right)^2 \right\} dx$$

この時,  $E(t)$  は  $t (0 \leq t < \infty)$  によらず一定であることが導かれる. これを一般に「波動方程式の解のエネルギー保存則」と呼ぶ. つまり,

- $E(t) = E(0) = \frac{1}{2} \int_0^1 \{g^2(x) + (f'(x))^2\} dx$  .

証明:

2つの実数  $0 < a < b < 1$  に対して,

$$E_{a,b}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \frac{1}{2} \int_a^b \left\{ \left( \frac{\partial u}{\partial t}(t, x) \right)^2 + \left( \frac{\partial u}{\partial x}(t, x) \right)^2 \right\} dx$$

と置くと,  $u(t, x)$  は,  $(t, x) \in [0, \infty) \times [0, 1]$  で連続で, その内部では滑らか, としているので, 任意の  $t \in (0, \infty)$  の近傍で, 微分と積分の順序交換ができて,

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt} E_{a,b}(t) &= \frac{1}{2} \int_a^b \left\{ \frac{\partial}{\partial t} \left( \frac{\partial u}{\partial t}(t, x) \right)^2 + \frac{\partial}{\partial t} \left( \frac{\partial u}{\partial x}(t, x) \right)^2 \right\} dx \\
&= \int_a^b \left( \frac{\partial u}{\partial t}(t, x) \frac{\partial^2 u}{\partial t^2}(t, x) + \frac{\partial u}{\partial x}(t, x) \frac{\partial^2 u}{\partial t \partial x}(t, x) \right) dx \\
&= \int_a^b \left( \frac{\partial u}{\partial t} \frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial u}{\partial x} \frac{\partial^2 u}{\partial t \partial x} \right) dx = \left[ \frac{\partial u}{\partial t} \frac{\partial u}{\partial x} \right]_a^b
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{\partial u}{\partial t}(t, b) \frac{\partial u}{\partial x}(t, b) - \frac{\partial u}{\partial t}(t, a) \frac{\partial u}{\partial x}(t, a) \\
&\rightarrow \frac{\partial u}{\partial t}(t, 1) \frac{\partial u}{\partial x}(t, 1) - \frac{\partial u}{\partial t}(t, 0) \frac{\partial u}{\partial x}(t, 0) = 0 \quad (a \rightarrow +0, b \rightarrow 1-0)
\end{aligned}$$

2行目から3行目は、式(1)による。また最後の部分は、式(2)より、

$$\frac{\partial u}{\partial t}(t, 0) = \frac{\partial u}{\partial t}(t, 1) = 0 \quad (t > 0),$$

を用いた。例えば、 $a = 1/n, b = 1 - 1/n$ と置けば、 $n \rightarrow \infty$ の時、任意の  $t \in (0, \infty)$  の近傍で一様収束なので、微分と極限の順序交換が成立し、

$$\frac{d}{dt}E(t) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{d}{dt}E_{1/n, 1-1/n}(t) = 0, \quad \text{よって } E(t) = \text{定数} \quad \forall t \in (0, \infty)$$

さらに、 $E(t)$  は、 $t = 0$ でも(右)連続なので、 $E(t) = E(0)$ 。

### 1次元波動方程式の初期値境界値問題の解の一意性

エネルギー保存則を用いて、元の波動方程式の初期値境界値問題の解の一意性を示そう。(1), (2), (3)を満す異なる解  $u_1(t, x), u_2(t, x)$ があったと仮定すると、

$$w(t, x) = u_1(t, x) - u_2(t, x)$$

は、 $(t, x) \in [0, \infty) \times [0, 1]$ で連続で、その内部では滑らかで、以下を満す。すなわち、(3)で、 $f(x) = g(x) \equiv 0$ の場合である。

$$\frac{\partial^2 w}{\partial t^2}(t, x) = \frac{\partial^2 w}{\partial x^2}(t, x) \quad \text{for } t > 0, 0 < x < 1 \quad (12)$$

$$w(t, 0) = w(t, 1) = 0 \quad \text{for } t \geq 0 \quad (13)$$

$$w(0, x) = 0, \lim_{t \rightarrow +0} \frac{\partial w}{\partial t}(t, x) = 0 \quad \text{for } 0 \leq x \leq 1 \quad (14)$$

この  $w$  のエネルギーは、 $E(0) = \frac{1}{2} \int_0^1 \{0 + 0\} dx = 0$  より、

$$E(t) = \frac{1}{2} \int_0^1 \left\{ \left( \frac{\partial w}{\partial t}(t, x) \right)^2 + \left( \frac{\partial w}{\partial x}(t, x) \right)^2 \right\} dx = 0$$

よって、 $\left( \frac{\partial w}{\partial t}(t, x) \right)^2 = \left( \frac{\partial w}{\partial x}(t, x) \right)^2 = 0$  が  $(t, x) \in (0, \infty) \times (0, 1)$  で成り立ち、つまり、 $w(t, x)$  は  $[0, \infty) \times [0, 1]$  で一定になり、 $w(t, x) = w(0, x) \equiv 0$  が言える。

## 21. 2次元空間での初期値境界値問題

### 2次元極座標でのラプラシアン

以降，平面や空間上の偏微分方程式を考えるが，その準備として，2次元極座標でのラプラシアンを定義する（計算はオンライン付録）。

平面座標上の原点  $(0, 0)$  以外で定義された関数  $u(x, y)$  がラプラス方程式：

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(x, y) + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2}(x, y) = 0$$

を満す時，極座標： $0 \leq \theta \leq 2\pi, 0 < r$ ， $\begin{cases} x = r \cos \theta \\ y = r \sin \theta, \end{cases}$  上で定義される関数

$w(r, \theta) \stackrel{\text{def}}{=} u(x(r, \theta), y(r, \theta))$  は，以下の偏微分方程式を満す。

$$\frac{\partial^2 w}{\partial r^2}(r, \theta) + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2 w}{\partial \theta^2}(r, \theta) + \frac{1}{r} \frac{\partial w}{\partial r}(r, \theta) = 0 \quad (15)$$

復習（2変数合成関数の微分）：

媒介変数の場合， $u(x, y), x = g_1(t), y = g_2(t)$ ，がある時，

$$\frac{d}{dt} u(g_1(t), g_2(t)) = \frac{\partial u}{\partial x}(g_1(t), g_2(t)) \frac{dg_1}{dt}(t) + \frac{\partial u}{\partial y}(g_1(t), g_2(t)) \frac{dg_2}{dt}(t)$$

座標変換の場合， $(x, y) \Leftrightarrow (p, q)$  の座標変換を  $\begin{cases} x = g_1(p, q) \\ y = g_2(p, q) \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} p = f_1(x, y) \\ q = f_2(x, y) \end{cases}$

$$w(p, q) = u(g_1(p, q), g_2(p, q)) \Leftrightarrow u(x, y) = w(f_1(x, y), f_2(x, y))$$

と置くと，任意の点  $(x, y)$  において，

$$\frac{\partial u}{\partial x}(x, y) = \frac{\partial w}{\partial p}(f_1(x, y), f_2(x, y)) \frac{\partial f_1}{\partial x}(x, y) + \frac{\partial w}{\partial q}(f_1(x, y), f_2(x, y)) \frac{\partial f_2}{\partial x}(x, y)$$

注：1変数の場合は， $y = f(x) \Leftrightarrow x = g(y)$  の関係の時， $\frac{df}{dx}(x) = \left( \frac{dg}{dy}(f(x)) \right)^{-1}$ ，

簡単に書くと， $\frac{dy}{dx} = \left( \frac{dx}{dy} \right)^{-1}$ ，である。

しかし，2変数の場合は， $(r, \theta) = (f_1(x, y), f_2(x, y)) \Leftrightarrow (x, y) = (g_1(r, \theta), g_2(r, \theta))$

の関係の時， $\frac{\partial f_1}{\partial x}(x, y) \neq \left( \frac{\partial g_1}{\partial r}(f_1(x, y), f_2(x, y)) \right)^{-1}$  である。これは偏微分する

ときに「停める」変数が異なるからである。上の例でいえば，

$$\frac{\partial r}{\partial x}(x, y) = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} = \frac{x}{r(x, y)} = \cos \theta(x, y), \quad \frac{\partial x}{\partial r}(r, \theta) = \cos \theta$$

なので，もちろん逆数の関係にはない。すなわち， $\frac{\partial r}{\partial x} \neq \left( \frac{\partial x}{\partial r} \right)^{-1}$ 。

## 2次元のラプラス方程式の境界値問題

(要点): 2次元の円環領域でのラプラス方程式の境界値問題を, 極座標を使った表現に直してから, 変数分離法で解く. 最も単純な場合のラプラス方程式の境界値問題であり, この場合は求積可能な単純な常微分方程式が導かれる.

実定数  $a, b, p, q$  ( $0 < a < b$ ) に対して, 2次元の円環領域  $a^2 \leq x^2 + y^2 \leq b^2$  上で連続かつ内部で滑らかな関数  $u(x, y)$  で,

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} = 0, \quad u(x, y) = \begin{cases} p & \{(x, y) | a^2 = x^2 + y^2\} \\ q & \{(x, y) | b^2 = x^2 + y^2\} \end{cases}$$

を満すものを求める.

これは, 半径  $a$  の内側の輪を高さ  $p$  の位置に, 半径  $b$  の外側の輪を高さ  $q$  の位置に置き, 2つの輪の間(隙間)に石鹸液で膜を張った時の, 膜の形状に対応すると考えられる. ただし重力の影響のない, 張力だけによる釣り合いを考える.

2次元極座標:  $0 \leq \theta \leq 2\pi, a \leq r \leq b$ ,  $\begin{cases} x = r \cos \theta \\ y = r \sin \theta \end{cases}$  を考え, その座標系でのラプラシアン(前述)を使うと,  $w(r, \theta) \stackrel{\text{def}}{=} u(r \cos \theta, r \sin \theta)$  として,

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} = 0 \Leftrightarrow \frac{\partial^2 w}{\partial r^2} + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2 w}{\partial \theta^2} + \frac{1}{r} \frac{\partial w}{\partial r} = 0$$

結局, 以下の「2変数(平面)ラプラス方程式の境界値問題」を解けばよい.

$$\frac{\partial^2 w}{\partial r^2}(r, \theta) + \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2 w}{\partial \theta^2}(r, \theta) + \frac{1}{r} \frac{\partial w}{\partial r}(r, \theta) = 0 \quad \text{for } a < r < b, 0 \leq \theta \leq 2\pi \quad (16)$$

$$w(a, \theta) = p, \quad w(b, \theta) = q \quad \text{for } 0 \leq \theta \leq 2\pi \quad (17)$$

$$w(r, 0) = w(r, 2\pi) \quad \text{for } a \leq r \leq b \quad (18)$$

これまでと同様に, 「変数分離法」によってこの解を求めてみよう. つまり,

$$w(r, \theta) = R(r)H(\theta), \quad R(r) \neq 0, H(\theta) \neq 0$$

のような形で, (16) & (17) & (18) を満す解があると仮定する. まず, (17) より,

$$H(\theta) = \frac{p}{R(a)} = \frac{q}{R(b)}, \quad 0 \leq \theta \leq 2\pi$$

であり, 定数になる. よって, 元から,  $w(r, \theta) = R(r), R(r) \neq 0$  の形の解だけを考えればよい. この時, (18) も自動的に満される. これらは, 領域も方程式も方向( $\theta$ )に関して一様(対称)であることに由来する.

この時, (16) より,  $R''(r) + \frac{1}{r}R'(r) = 0$  となるが,  $r > 0$  を考慮すると, 結局

$$rR''(r) + R'(r) = 0, \quad R(a) = p, R(b) = q$$

という常微分方程式の境界値問題になる．

$$r \frac{d^2 R}{dr^2} + \frac{dR}{dr} = \frac{d}{dr} \left( r \frac{dR}{dr} \right) = 0 \Leftrightarrow \frac{dR}{dr} = \frac{C}{r}$$

より，その一般解は， $C, D$  を定数として，

$$R(r) = C \log r + D$$

$C, D$  は境界条件  $R(a) = p, R(b) = q$  より， $C = \frac{p - q}{\log a - \log b}$ ， $D = \frac{p \log b - q \log a}{\log b - \log a}$ ．

よって，この問題の場合は，以下のような簡単で具体的な形が求まる．

$$\begin{aligned} u(x, y) &= R(r(x, y)) = \frac{1}{\log b - \log a} ((q - p) \log \sqrt{x^2 + y^2} + p \log b - q \log a) \\ &= \frac{1}{\log b - \log a} \left( q \log \frac{\sqrt{x^2 + y^2}}{a} + p \log \frac{b}{\sqrt{x^2 + y^2}} \right) \end{aligned}$$

### ラプラス方程式の境界値問題の解の一意性

一般に以下の「ラプラシアン」の最大値原理が成り立つ（オンライン付録）． $n$ 次元空間内の有界な閉集合  $D$  とその境界  $\partial D$  を考える． $D$  上で定義された連続関数  $u(\mathbf{x})$  に対して，

- $\Delta u(\mathbf{x}) \geq 0$  ( $\mathbf{x} \in D \setminus \partial D$ ) ならば， $u(\mathbf{x})$  は境界  $\partial D$  上の点で最大値を取る．
- $\Delta u(\mathbf{x}) \leq 0$  ( $\mathbf{x} \in D \setminus \partial D$ ) ならば， $u(\mathbf{x})$  は境界  $\partial D$  上の点で最小値を取る．

ただし， $D \setminus \partial D$  は  $D$  の内部を表す（ $\setminus$  は集合差の記号）．

これは，1次元ではよく知っている，2階微分と下に凸・上に凸の関係である．それが，一般に多次元でも成り立つ．この最大値原理を示せば，ラプラス方程式の境界値問題の解の一意性は簡単に証明できる（各自考えてみてください）．



## オンライン付録

### A-1. 級数解の一樣収束性 (1次元波動方程式の初期値境界値問題)

示すべきことは (7) および (11) の右辺の一樣収束性であり,

- $A_n$  が  $f(x)$  の滑らかさに応じて,  $n$  の増加に対して急減少すること,
- $B_n$  が  $g(x)$  の滑らかさに応じて,  $n$  の増加に対して急減少すること,

から, 項別微分する際に出てくる  $n, n^2$  を打ち消して一樣収束することが言える.

つまり, 初期状態を表す関数が滑らか (より高階まで連続微分可能) なほど, 初期値境界値問題の解の滑らかさを保証し, フーリエ級数を使った構成の証明を簡単にする.

(7) および (11) の右辺のうちのどれでも1つを  $\sum_{n=1}^{\infty} q_n(t, x)$  と置いた時,

$Q_{n_0, m}(t, x) \stackrel{\text{def}}{=} \sum_{n=n_0}^{n_0+m} q_n(t, x)$  として,  $\varepsilon > 0$  に対して大きな  $n_0$  を取れば,

$$|Q_{n_0, m}(t, x)| \leq \varepsilon \quad \text{for } m = 0, 1, \dots; 0 \leq t, -\infty < x < \infty \quad (19)$$

となることを示せばよい.

例えば,  $\sum_{n=1}^{\infty} -(n\pi)^2 (B_n \sin n\pi t + A_n \cos n\pi t) \sin n\pi x$  の一樣収束性を示す場合,

$$q_n(t, x) \stackrel{\text{def}}{=} -(n\pi)^2 (B_n \sin n\pi t + A_n \cos n\pi t) \sin n\pi x$$

と置き, (19) を証明しよう.

まず,  $\sin 0 = \sin n\pi = 0$ ,  $f(0) = f(1) = 0$ ,  $f''(0) = f''(1) = 0$ , 及び  $f$  の滑らかさの仮定を用いて, 部分積分を繰り返すと,

$$\begin{aligned} \frac{A_n}{2} &= \int_0^1 f(x) \sin n\pi x dx = -\frac{1}{n\pi} \left( [f(x) \cos n\pi x]_0^1 - \int_0^1 f'(x) \cos n\pi x dx \right) \\ &= \frac{1}{n\pi} \int_0^1 f'(x) \cos n\pi x dx \\ &= \frac{1}{(n\pi)^2} \left( [f'(x) \sin n\pi x]_0^1 - \int_0^1 f''(x) \sin n\pi x dx \right) = \dots \\ &= \frac{1}{(n\pi)^3} \left( [f''(x) \cos n\pi x]_0^1 - \int_0^1 f'''(x) \cos n\pi x dx \right) = \dots \\ &= -\frac{1}{(n\pi)^4} \left( [f'''(x) \sin n\pi x]_0^1 - \int_0^1 f''''(x) \sin n\pi x dx \right) \\ &= \frac{1}{(n\pi)^4} \int_0^1 f''''(x) \sin n\pi x dx \\ |A_n| &\leq \frac{2}{(n\pi)^4} \int_0^1 |f''''(x)| dx \leq \frac{K_1}{n^4} \quad \text{ただし } K_1 \stackrel{\text{def}}{=} \frac{2}{\pi^4} \max_{0 \leq x \leq 1} |f''''(x)| \end{aligned}$$

同様に,  $\sin 0 = \sin n\pi = 0$ ,  $g(0) = g(1) = 0$ , 及び  $g$  の滑らかさの仮定を用いて, 部分積分を繰り返すと, ある定数  $K_2$  があって,

$$\begin{aligned} \frac{n\pi B_n}{2} &= \int_0^1 g(x) \sin n\pi x dx = -\frac{1}{n\pi} \left( [g(x) \cos n\pi x]_0^1 - \int_0^1 g'(x) \cos n\pi x dx \right) = \dots \\ &= \frac{1}{(n\pi)^3} \left( [g''(x) \cos n\pi x]_0^1 - \int_0^1 g'''(x) \cos n\pi x dx \right) \\ |B_n| &\leq \frac{2}{(n\pi)^4} \max(|g''(1)|, |g''(0)|) \times 2 + \frac{2}{(n\pi)^4} \max_{0 \leq x \leq 1} |g'''(x)| \leq \frac{K_2}{n^4} \end{aligned}$$

一方,  $\sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n^2} < \infty$  なので, どんな  $\varepsilon > 0$  に対しても十分大きな  $n_0$  を取れば, 任意の  $m = 0, 1, \dots, t_0 \leq t$ ,  $-\infty < x < \infty$  に対して,

$$\begin{aligned} |Q_{n_0, m}(t, x)| &\leq \sum_{n=n_0}^{n_0+m} |q_n(t, x)| \leq \sum_{n=n_0}^{n_0+m} (n\pi)^2 (|B_n| |\sin n\pi t| + |A_n| |\cos n\pi t|) |\sin n\pi x| \\ &\leq \sum_{n=n_0}^{n_0+m} (n\pi)^2 \left( \frac{K_1}{n^4} + \frac{K_2}{n^4} \right) = \pi^2 (K_1 + K_2) \sum_{n=n_0}^{n_0+m} \frac{1}{n^2} \leq \varepsilon \end{aligned}$$

## A-2. 2次元極座標のラプラシアン

一般に,  $(x, y) \Leftrightarrow (p, q)$  の座標変換を  $\begin{cases} x = g_1(p, q) \\ y = g_2(p, q) \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} p = f_1(x, y) \\ q = f_2(x, y) \end{cases}$

$$w(p, q) = u(g_1(p, q), g_2(p, q)) \Leftrightarrow u(x, y) = w(f_1(x, y), f_2(x, y))$$

と置くと,  $\frac{\partial u}{\partial x} = \frac{\partial w}{\partial p} \frac{\partial f_1}{\partial x} + \frac{\partial w}{\partial q} \frac{\partial f_2}{\partial x}$ . 詳しく書くと任意の点  $(x, y)$  において,

$$\frac{\partial u}{\partial x}(x, y) = \frac{\partial w}{\partial p}(f_1(x, y), f_2(x, y)) \frac{\partial f_1}{\partial x}(x, y) + \frac{\partial w}{\partial q}(f_1(x, y), f_2(x, y)) \frac{\partial f_2}{\partial x}(x, y)$$

これは同時に以下も意味する: 任意の点  $(p, q)$  において,

$$\frac{\partial u}{\partial x}(g_1(p, q), g_2(p, q)) = \frac{\partial w}{\partial p}(p, q) \frac{\partial f_1}{\partial x}(g_1(p, q), g_2(p, q)) + \frac{\partial w}{\partial q}(p, q) \frac{\partial f_2}{\partial x}(g_1(p, q), g_2(p, q))$$

そこで, 式 (15) の意味と計算の流れを示す.

まず, 極座標の定義より,  $r = \sqrt{x^2 + y^2}$ ,  $\theta = \arctan \frac{y}{x}$ . ただし,  $\theta = \arctan \frac{y}{x}$  は, 厳密には,  $x, y$  の正負 (4通り) によって,  $0 \leq \theta \leq 2\pi$  を4つの領域に分割し,

- $x \geq 0, y \geq 0 \Leftrightarrow 0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2}$ ,  $x \leq 0, y \geq 0 \Leftrightarrow \frac{\pi}{2} \leq \theta \leq \pi$ ,
- $x \leq 0, y \leq 0 \Leftrightarrow \pi \leq \theta \leq \frac{3\pi}{2}$ ,  $x \geq 0, y \leq 0 \Leftrightarrow \frac{3\pi}{2} \leq \theta \leq 2\pi$ .

のように対応させ、明示する場合は、 $\theta = \text{Atan}(x, y)$  と書くことにする。

$r, \theta$  を  $x, y$  の関数とみて、それらで偏微分すると、

- $\frac{\partial r}{\partial x} = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} = \frac{x}{r}, \quad \frac{\partial r}{\partial y} = \frac{y}{r},$
- $\frac{\partial \theta}{\partial x} = \frac{1}{1 + y^2/x^2} \cdot \frac{-y}{x^2} = -\frac{y}{r^2}, \quad \frac{\partial \theta}{\partial y} = \frac{1}{1 + y^2/x^2} \cdot \frac{1}{x} = \frac{x}{r^2}$
- $\frac{\partial^2 r}{\partial x^2} = \frac{\partial}{\partial x} \left( \frac{x}{r} \right) = \frac{1}{r} - \frac{x}{r^2} \frac{\partial r}{\partial x} = \frac{r^2 - x^2}{r^3} = \frac{y^2}{r^3}, \quad \frac{\partial^2 r}{\partial y^2} = \frac{x^2}{r^3}$
- $\frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} = \frac{\partial}{\partial x} \left( -\frac{y}{r^2} \right) = -y \left( -\frac{2}{r^3} \right) \frac{\partial r}{\partial x} = \frac{2xy}{r^4}, \quad \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} = -\frac{2xy}{r^4}$

$w(r, \theta) \stackrel{\text{def}}{=} u(r \cos \theta, r \sin \theta)$  に対し、 $w_r \stackrel{\text{def}}{=} \frac{\partial w}{\partial r}, w_\theta \stackrel{\text{def}}{=} \frac{\partial w}{\partial \theta}, w_{r\theta} \stackrel{\text{def}}{=} \frac{\partial^2 w}{\partial r \partial \theta}, \dots$  のように表記し（簡単のために）、

$$\begin{aligned} \frac{\partial u}{\partial x}(x, y) &= \frac{\partial}{\partial x} w(r, \theta) \quad (\text{ただし } r = \sqrt{x^2 + y^2}, \theta = \text{Atan}(x, y)) \\ &= w_r(r(x, y), \theta(x, y)) \frac{\partial r}{\partial x}(x, y) + w_\theta(r(x, y), \theta(x, y)) \frac{\partial \theta}{\partial x}(x, y) \\ \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(x, y) &= \frac{\partial}{\partial x} \left( w_r(r(x, y), \theta(x, y)) \frac{\partial r}{\partial x}(x, y) \right) + \frac{\partial}{\partial x} \left( w_\theta(r(x, y), \theta(x, y)) \frac{\partial \theta}{\partial x}(x, y) \right) \\ &= \left( w_{rr} \frac{\partial r}{\partial x} + w_{r\theta} \frac{\partial \theta}{\partial x} \right) \frac{\partial r}{\partial x} + w_r \frac{\partial^2 r}{\partial x^2} + \left( w_{\theta\theta} \frac{\partial \theta}{\partial x} + w_{r\theta} \frac{\partial r}{\partial x} \right) \frac{\partial \theta}{\partial x} + w_\theta \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} \\ &= w_{rr} \left( \frac{\partial r}{\partial x} \right)^2 + 2w_{r\theta} \frac{\partial \theta}{\partial x} \frac{\partial r}{\partial x} + w_{\theta\theta} \left( \frac{\partial \theta}{\partial x} \right)^2 + w_r \frac{\partial^2 r}{\partial x^2} + w_\theta \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} \end{aligned}$$

のように進めて、 $\Delta u$  を計算する。

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} = Aw_{rr} + 2Bw_{r\theta} + Cw_{\theta\theta} + Dw_r + Ew_\theta$$

と置くと、 $A \stackrel{\text{def}}{=} \left( \frac{\partial r}{\partial x} \right)^2 + \left( \frac{\partial r}{\partial y} \right)^2 = \frac{x^2}{r^2} + \frac{y^2}{r^2} = 1,$

$$B \stackrel{\text{def}}{=} 2 \left( \frac{\partial r}{\partial x} \frac{\partial \theta}{\partial x} + \frac{\partial r}{\partial y} \frac{\partial \theta}{\partial y} \right) = 2 \left( \frac{x}{r} \left( -\frac{y}{r^2} \right) + \frac{y}{r} \cdot \frac{x}{r^2} \right) = 0,$$

$$C \stackrel{\text{def}}{=} \left( \frac{\partial \theta}{\partial x} \right)^2 + \left( \frac{\partial \theta}{\partial y} \right)^2 = \frac{y^2}{r^4} + \frac{x^2}{r^4} = \frac{1}{r^2}, D \stackrel{\text{def}}{=} \frac{\partial^2 r}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 r}{\partial y^2} = \dots = \frac{1}{r}, E \stackrel{\text{def}}{=} \frac{\partial^2 \theta}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \theta}{\partial y^2} = \dots = 0$$

よって、

$$\Delta u(x, y) = \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}(x, y) + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2}(x, y) = 0 \quad \Leftrightarrow$$

$$w_{rr}(r(x, y), \theta(x, y)) + \frac{1}{r(x, y)^2} w_{\theta\theta}(r(x, y), \theta(x, y)) + \frac{1}{r(x, y)} w_r(r(x, y), \theta(x, y)) = 0$$

### A-3. ラプラスシアン の 最大値原理 の 証明

以下, 2次元で書くが次元には関係ない. 例えば,

- $\Delta u(x) \geq 0$  ( $x \in D \setminus \partial D$ ) ならば,  $u(x)$  は境界  $\partial D$  上の点で最大値を取る.

を証明するには,  $M \stackrel{\text{def}}{=} \max_{(x,y) \in \partial D} u(x,y)$  と置いて,  $u(x,y) \leq M$  ( $\forall (x,y) \in D$ ) を示せばよい.

そのために, 任意の  $(x_0, y_0) \in D$  を固定し,  $D \subset \{(x,y) \mid |x-x_0|^2 + |y-y_0|^2 \leq a^2\}$  となるような十分大きい半径  $a$  を考える. 任意の  $\varepsilon > 0$  に対して,

$$w_\varepsilon(x,y) \stackrel{\text{def}}{=} u(x,y) - M - \varepsilon(a^2 - |x-x_0|^2 - |y-y_0|^2), \quad (x,y) \in D$$

を定義し,  $w_\varepsilon(x,y) \leq 0$  を示せばよい. なぜなら,

$$u(x,y) - M \leq \varepsilon(a^2 - |x-x_0|^2 - |y-y_0|^2), \quad \forall \varepsilon > 0$$

が言えるならば, 右辺は正で, かつ  $\varepsilon$  はいくらでも 0 に近づけることができるので,  $u(x,y) - M \leq 0$  が言えることになる.

そこで, 以下は,  $(x^*, y^*) \in D$  で  $w_\varepsilon$  が最大値を取るとし,  $w_\varepsilon(x^*, y^*) > 0$  (つまり, 最大値が正) と仮定して, 矛盾を導く.

- $M$  の定義より,  $\forall (x,y) \in \partial D$  ( $D$  の境界) では,  $u(x) - M \leq 0$  であり,  $a$  は十分大きいので,  $\forall (x,y) \in \partial D$  において,

$$w_\varepsilon(x,y) = u(x,y) - M + \varepsilon(|x-x_0|^2 + |y-y_0|^2 - a^2) \leq 0 + 0 = 0$$

よって,  $(x^*, y^*) \notin \partial D$ .

- 一方, もし,  $(x^*, y^*) \in D \setminus \partial D$  ならば,  $\frac{\partial^2 w_\varepsilon}{\partial x^2}(x^*, y^*) \leq 0$ ,  $\frac{\partial^2 w_\varepsilon}{\partial y^2}(x^*, y^*) \leq 0$  より,  $\Delta w_\varepsilon(x^*, y^*) \leq 0$  のはず. 一方,  $\forall (x,y) \in D \setminus \partial D$  において,

$$\Delta w_\varepsilon(x,y) = \Delta u(x,y) + \varepsilon \Delta(|x-x_0|^2 + |y-y_0|^2) \geq 0 + \varepsilon \times 4 = 4\varepsilon > 0$$

なので,  $(x^*, y^*) \notin D \setminus \partial D$  を意味する.

つまり「 $w_\varepsilon$  の最大値が正」という仮定は矛盾を導いたので,  $w_\varepsilon(x,y) \leq 0$ ,  $\forall (x,y) \in D$ .